“子供をもつ”ことをめぐる現代社会の意識

上野行良

子供をもつことに関する時代の風潮などについての洞察的な論考は数多くある。しかしそれらは、眼につきやすい小集団や衝撃的な事件の報道などに基づいた考察が多く、大勢を占めるはずの目立たぬ人々のことが意外に無視されている場合が多い。そこで本報告では、子供をもつことにかかわる最近の意識調査の報告をまとめて紹介し、子供をもつことをめぐる現代人の意識の一般的な傾向を知る手がかりにしたい。

1. “子供をもちたい”

一夫婦がもつ子供の数が減ったり、結婚が高齢化している状況などをみると、子供をもつ意志のない人々が増えているようにみえる。しかし、一方では生殖技術の発達を熱望する人々も後を絶たない。現代社会のなかで人々は子供をもつことをどのように感じているのであろうか。

厚生省人口問題研究所の報告によれば、1977年から1987年の10年間において、配偶者のいる女性の予定子供数も理想子供数も減少してはいない。表1－1は、20歳から34歳までの配偶者のいる女性に「あなたがたご夫婦は全部で何人のお子さんをもつおつもりなのでしょうか？」と質問した回答結果である。1977年以来、平均は2人以上を維持してるばかりか、わずかであるが増加傾向がみられる。1987年時点の予定子供数は、「2人」が6割、「3人」が3割を占め、0～1人を予定しているのは8％に満たない。つまり少なくとも2人の子供をもちたいという気持ちは変わらずもたれているのである。

表1－1 妻の年齢別“予定”子供数の推移（平均人数）［大谷,1988より作成］

妻の年齢	1977年	1982年	1987年
20～24歳	2.19	2.25	2.26
25～29歳	2.15	2.29	2.35
30～34歳	2.21	2.23	2.28

全国の50歳未満の有配偶女子を対象に無作為抽出を行い、留置法、密封回収による質問紙調査を実施。1987年の有効回収率は95.3％で標本数は20～24歳が305人、25～29歳が1202人、30～34歳が1732人である。

同様に「あなたがたご夫婦にとって理想的な子供の数は何人ですか？」と質問した回答結果が表1－2である。やはり1977年以来、平均は2人以上を越えたままである。20～24歳では若干減少傾向にあるが、1977年・1982年の20～24歳が、5年後、10年後と年齢が上がるにつれ理想子供数が増加していることから、1987年の20～24歳も今後理想子供数が上がる可能性が高い。

以上のように少なくとも1977～1987年までの10年間においては最低2人の子供がほしいという気持ちに大きな変化はなく、子供をもつことの意識的な回避という現象は進行しているとはいえないのである。

表1－2 妻の年齢別平均“理想”子供数の推移（平均人数）［大谷,1988より作成］

妻の年齢	1977年	1982年	1987年
20～24歳	2.48	2.45	2.39
25～29歳	2.49	2.57	2.57
30～34歳	2.57	2.64	2.67
35～39歳	2.64	2.68	2.70
40～44歳	2.69	2.63	2.71
45～49歳	2.78	2.61	2.68
総　数	2.61	2.62	2.66

表1－1と同じ調査。1987年の標本数は以下のとおり。20～24歳：305、25～29歳：1202、30～34歳：1732、35～39歳：2246、40～44歳：2676、45～49歳：1523。

では、多くの場合、子供をもつことの前提となる「結婚」についての意識はどうであろうか。現在初婚年齢が高くなっているが、結婚への拒否感が高まっているといえるのであろうか。

同じく厚生省人口問題研究所の報告によれば「一生結婚しない」という独身男女は現在でも少数である（表1－3）。18～34歳の独身男性では、「一生結婚しない」と考えている者は1982年で2.3％、1987年で4.5％である。若干増加しており、今後さらに増加する可能性もあるが、現時点ではまだ多いとはいえない。女性に関しては、1982年で4.1％、1987年で4.6％で大きな変化はない。大半の

若者は結婚することを望んでいると考えてよいであろう。

さらに、結婚意志をもつ回答者に、「子供は何人くらいほしいですか？」と希望子供数を質問した結果は、男性で平均約2.3人、女性では2.2～2.3人であったと報告されている。この数値は同年齢層の有配偶者の予定子供数とほぼ同じである（表1－1参照）。すなわち独身男女においても、子供を2人以上はつくりたいとほとんどの者が感じているのである。

以上のように現在のところでは、ほとんどの人は、結婚して子供を2人以上もちたいと考えている。このような意識は、学歴などのフェイスシートによる差がほとんどみられない。結婚が遅れたり子供がつくれなくても、それは社会制度など外的な要因によるものであり、個人の意識など内的な要因のためではないのであろう。多くの人にとって子供は「ほしい」ものなのである。

表1－3　年齢別にみた独身者の生涯の結婚の意志（%）［金子,1988より作成］

［男性］

年　齢	1982年				1987年			
	N	いずれ結婚する	一生結婚しない	不　詳	N	いずれ結婚する	一生結婚しない	不　詳
18～19	494	96.0	1.8	2.2	601	90.0	5.7	4.3
20～24	1138	97.0	1.2	1.7	1464	92.6	3.6	3.8
25～29	730	95.8	2.9	1.4	836	93.9	3.6	2.5
30～34	370	92.4	5.1	2.4	398	86.9	8.3	4.8
総　数	2732	95.9	2.3	1.8	3299	91.8	4.5	3.7

［女性］

年　齢	1982年				1987年			
	N	いずれ結婚する	一生結婚しない	不　詳	N	いずれ結婚する	一生結婚しない	不　詳
18～19	466	95.5	2.6	1.9	643	93.5	4.7	1.9
20～24	1106	97.5	1.9	0.6	1337	95.1	2.8	2.2
25～29	373	92.5	4.0	3.5	465	91.8	5.6	2.6
30～34	165	72.7	23.6	3.6	160	75.6	16.9	7.5
総　数	2110	95.9	4.1	1.7	2605	92.9	4.6	2.5

数値は%

全国の18～34歳の独身男女を対象に無作為抽出法を行ない、留置法、密封回収による調査を実施。有効標本数は6074（有効回収率83.8%）である。

このような意識を反映したデータとして、高校生の理想の生き方を調査した結果がある（ライフデザイン研究所,1994)。1993年に首都圏の高校生に15種の代表的な生き方を提示し、「したい」生き方を多重回答形式で求めた。その結果、男女ともに最も多かったのは「家庭を大切にする」生き方で、それに次ぐのは「子供とよく遊ぶ」生き方であった（表1－4)。「仕事」や「享楽」や「金」や「社会貢献」などよりも“子供のいる家庭”を楽しむ生き方を高校生は求めているのである。この結果は男女で差がないことも興味深い。男女ともに家庭的な生活を理想としているのである。これから成人する青年たちにとっても家庭をもち子供をもつことは個人的に高い価値づけがなされているとみることができる。

表1－4　現代高校生の望む生き方(%)
[ライフデザイン研究所,1994より作成]

	男　子	女　子
家庭を大切にする	61	61
子供とよく遊ぶ	53	52
自分の楽しみを追及する	48	45
仕事と家庭を両立させる	52	37
金持ちになり豊かに暮らす	45	36
仕事をバリバリこなす	28	30
周囲との調和を考えて生きてゆく	28	29
芸術や美しいものを楽しむ	14	31
有名になる	26	17
社会や人のためにつくす	17	18
環境問題に取り組む	16	17
国際社会で活躍する	15	15
権力を握って社会を動かす	9	4
学問を通して真理を明らかにする	7	6
社会改革を目指して活躍する	4	2
あてはまるものはない	2	2

数値は%。調査は1993年に行われた。調査対象者は東京50キロ圏内の高校生で、無作為抽出された。訪問留置法によって実施。有効回答数は614名（男子307名：女子307名)。有効回収率は68.2%である。

さらにこのような家庭志向は、それが社会的に望ましいというだけではなく、個人的な喜びのためであると考えられる傾向もみられる。表1－5は、高校生の抱く結婚のイメージである。「幸せ」「あたたかい」「明るい」など肯定的なイメージが圧倒的に強い。また図1－1は、高校生の望む生き方について、「生き方」同士の関連を図示したものである。近くにある項目は、それだけ共通の者に望まれていることを表わす。興味深いのは女子で、「子供と遊ぶ」「家庭を大切にする」生き方が、「自分の楽しみを追及する」といった享楽的な生き方に近在している。つまり、女子高校生にとって、家庭に入ることは「楽しみ」なのであり、安楽な生き方の一つなのである。

こうしてみると、“子供がほしい”という思いは、一般的にはかなり積極的な意欲であると推察できる。結婚し子供をもつことは多くの人にとって“理想的”なことなのである。

表1－5　高校生の結婚イメージ(%)
[ライフデザイン研究所,1992より作成]

あなたは結婚にどのようなイメージを持っていますか。(多重回答)

	男　子	女　子
幸せ	56	65
あたたかい	41	50
明るい	39	43
責任が重くなる	43	37
楽しい	32	38
気持ちが安定する	35	33
大人になった感じ	29	31
社会的信用が得られる	21	15
大人として当然	20	11
しばられる	13	18
自由がない	11	16
おもしろそう	11	14
わずらわしい	6	5
古くさい	2	2
暗い	2	1
あてはまるものはひとつもない	10	6

調査は1991年に行われた。調査対象者は東京50キロ圏内の高校生で、無作為抽出された。訪問留置法によって実施。有効回答数は620名(男子307名：女子311名)。有効回収率は68.9%である。

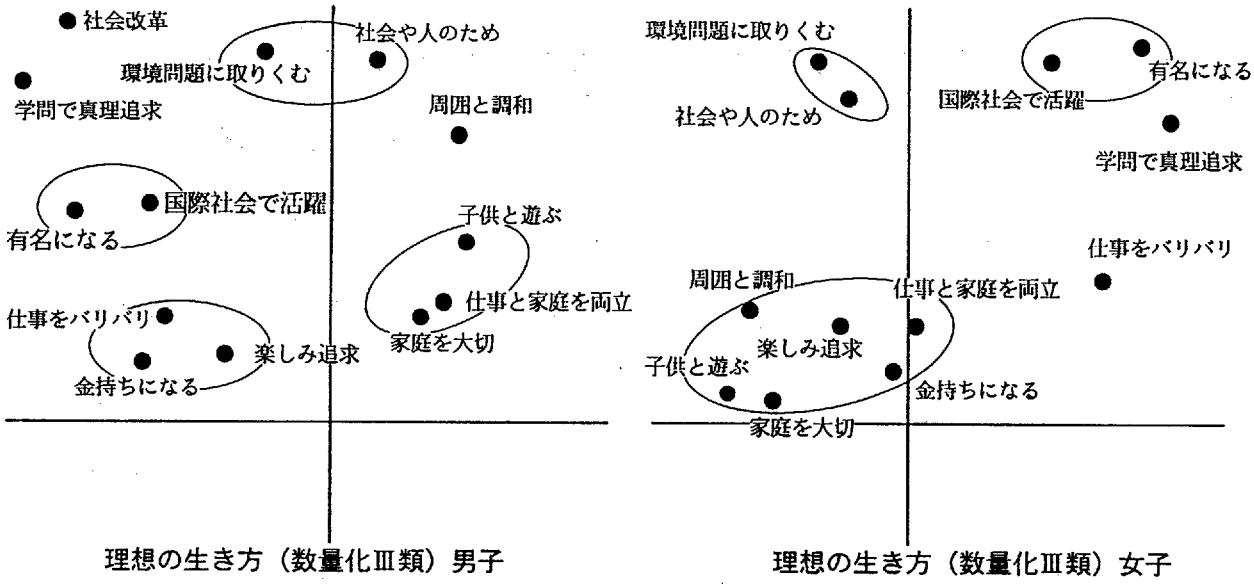

図１－１　高校生の望む生き方の関連［福富他,1992年より引用］

2. “子供をもつべき”という社会的規範

子供をもつことが肯定的にとらえられている背後には、「子供をもたなければならない」という社会的価値観が潜んでいる可能性がある。そこで、「子供がいない」ことに対する社会の反応に関する調査をみてみよう。

鹿志村(1992)は、大学生を対象に、“子供をつくる女性”と“子供をつくらない女性”のイメージを比較している。都内共学大学の学生101名（男性40名；女性61名）に20個の形容詞を提示して、各形容詞について“子供をつくる女性”“子供をつくらない女性”それぞれのイメージにあう程度の評定を求めた。その結果、“子供をつくらない女性”は、“子供をつくる女性”に比べると、現代的・新しい・はきはきしたといった「新しい」イメージと同時に、いかめしい・男性的な・利己的ななど「女性的なやさしさに欠ける」イメージや、感情的な・未熟なといった「未成熟」なイメージが強かった。すなわち子供を産まない女性は進んではいるが、やさしさに欠ける子供なのだ、といったイメージを抱かれがちなのである。しかもこのうち「女性的なやさしさに欠ける」イメージは男子よりも女子の方に強く抱かれていた。女子の方が子供をつくらない女性を厳しく評価しているのである。

さらに、鹿志村（1993）は同様の調査を20代の未婚女性（都内在住在勤の59名）や40代以上の既婚女性（都内在住在勤の34名）を対象にしても行ない、同様の結果を得ている。世代別に比較しても、20代未婚女性の方が「新しい」というイメージを強く抱いているという点で差があるのみで、「やさしさに欠ける」などでは差がみられなかった。子供をつくらない女性へのステレオタイプがかなり強くて明瞭であることがわかる。

このようなステレオタイプがある以上、“子供のいない家庭”は当然批判的な眼でみられることになる。表２－１は結婚に関わる様々なライフスタイルについての調査結果である。「認める」と「どちらかといえば認める」を合わせた容認率をみると、「一生独身で暮らす」が半数に認められているのに対し、「子供を産まない結婚」は4割程度にしか容認されていない。別居や同棲や未婚の母でさえ3割に容認されていることを考えると“子供を産まない”ことへの抵抗感がいかに強いかがわかる。“結婚＝子供をもつ”という図式の強固さが感じられる。

以上の結果は一般に認めるかについての見解であるが、もっと身近な、自分に直接関わってくる状況ではさらに厳しくなる。表2－2は「自分の子供」がそのようなライフスタイルを選んだら、どうするかについて質問した結果である。身近なことになるといずれのライフスタイルもほとんど受けいられなくなる。「結婚して子供を産まない」も6割近くにはっきりと反対される。世間ならまだしも、自分の身近にこのようなことが起こることはほとんどの人にとって容認し難いことなのであ

表２－１　子供のいない家庭などを認める割合（%）

［時事通信社「時事世論調査」 年鑑世論調査平成３年・平成４年版より作成］

	認める	どちらかといえば認める	どちらかといえば認めない	認めない	わからない
一生独身で暮らす	30.6 (36.3)	19.8 (18.6)	16.5 (14.6)	25.0 (22.8)	8.2 (7.7)
子供を産まない結婚	20.2 (26.0)	18.6 (16.0)	19.0 (18.9)	34.2 (31.6)	8.0 (7.5)
同居しない結婚（通い婚・別居結婚）	14.3 (16.4)	13.6 (13.0)	19.2 (21.5)	45.4 (42.4)	7.5 (6.8)
戸籍を入れない同居（同棲）	13.2 (15.4)	12.4 (12.8)	18.7 (19.7)	49.2 (45.2)	6.6 (7.0)
未婚の母	12.2 (11.6)	11.6 (11.7)	19.3 (18.9)	49.6 (50.7)	7.3 (7.0)

上段が1991年、下段（ ）内が1990年の結果。調査対象者は全国20歳以上の者で、有効回答数は1990年が2137人（有効回答率71.2％）、1991年が1422人（同71.1％）である。個別面接聴取法によって実施された。

表２－２　子供のいない家庭などを認める割合（%）
－自分の子供の場合－

［東京都情報連絡室「家庭に関する世論調査」 年鑑世論調査平成３年版より作成］

あなたは、あなたのお子さんが次のような暮らしを選ぶことについてどのようにお考えですか。お子さんのいない方もいるとしてお答え下さい。

	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	分からない
一生独身	1.0	1.5	28.5	56.5	12.5
結婚して子供を産まない	0.8	1.9	27.4	56.5	13.4
戸籍を入れない	0.8	1.8	18.4	69.8	9.2

調査は1990年に実施。調査対象は東京都20歳以上の者（島部を除く）で、有効回答数は2094人（有効回答率69.8％）である。個別面接聴取法によって実施された。

る。これが東京都内で、若年層も含む調査の結果であることを考えると、結婚して子供を持つことがいかに根強い社会規範であるかがわかる。

このような「子供をもつべし」という社会的規範の強さは子供ができない夫婦に強い圧力を及ぼす。杉内・佐藤・川越・広井（1992）は不妊症夫婦を対象とした調査を行なっているが、その中で「体外授精をうけてまでも子供がほしい」理由を質問した結果、8割が「子供のいないことでいやな思いをした」と回答していた。多くは親族から子供がいないことについて否定的に言われることがその内容である。つまり不妊で悩む人の多くが、子供がいないこと自体の寂しさだけではなく、対人的・社会的な圧力につらい思いをしているのである。「子供がいなくてはならない」という信念の犠牲になっている人たちがいるのである。

以上のように“子供がほしい”という積極的な希望と表裏をなすものとして、“子供がいない”ことへの社会的非難がある。こうした社会の中で子供をもたずにいることは難しい。このような社会的規範が崩れない限り、子供を欲しがる人々が急激に減ることはないであろう。

表２－３　体外授精を受けてまでも子供がほしいのはなぜ？(％：多重回答)
[杉内・佐藤・川越・広井,1992より引用]

寂しい	78％
子供がいないことでいやな思いをした	80％
(内容)	
両親から早く孫の顔がみたいと言われる	44％
子供の話がでるとき	79％
跡継ぎがいないと言われる	79％
親戚が集まったときに子供がいないことを言われる	51％

調査対象者は1990年4月～7月に体外授精・胚移植を受けた患者50名と1990年12月～1991年8月に山形大学産婦人科内分泌・不妊外来および山形大学関連病院産婦人科外来を挙児希望で受診した不妊症患者95名と体外授精によって妊娠し分娩をした76名である。

3. 家庭における子供の“価値”

子供をもつことが常識であり、子供をもつことを望む人が多い現状であるが、子供をもったあとの家庭での子供の位置付けはどうであろうか。

内閣総理大臣官房広報室の調査によると、「結婚して家庭を築くことの意義」として最も多かったのは「精神的安らぎの場を得られる」(49.1％)であったが、それと並んで「結婚して子供を産み育てることは、生きがいにつながる」(46.6％)が半数近くに選ばれていた(表３－1)。また、時事通信社の調査によると、家庭生活は夫婦よりも“子供”を中心に考えるべきだという意見が6割に支持されている。さらに結婚生活がうまくいかなくなったときの離婚についても、「子供や家庭のためにがまんする」べきであるという意見が2割に支持され、「離婚すべき」や「経済的に双方がやっていけるなら離婚すべきだ」などを上回っている(表3－2)。

このようにみてゆくと、現在の日本の家庭においては、子供の存在が家庭の中心的な位置を占める傾向があるといえよう。家庭は子供のためにあるのであり、子供を犠牲にするようなことがあってはならない、という信念の強さがうかがえる。子供は家族の喜びであるとともに、家族の絆を保つ働きも期待されている。子供をもつことにはとても大きな意義が感じられているのである。

表３－１　結婚して家庭を築く意義(％)
[内閣総理大臣官房広報室「女性の暮らしと仕事に関する世論調査」
年鑑世論調査平成４年度版より引用]

結婚して家庭を築くことで、精神的安らぎの場が得られる	49.1
結婚して子供を産み育てることは、生きがいにつながる	46.6
結婚すれば、おたがいに高めあう仲間を得ることができ、人間として成長できる	35.0
これといった理由はないが、人は結婚するのが自然である	17.1
結婚すれば社会的に認められる	11.2
結婚すれば、経済的に安定する	9.2
結婚して子供を産み育てることは、自分の老後を面倒みてもらえることにつながる	8.7
その他	0.1
結婚して家庭を築くことに特に意義を見いださない	1.4
わからない	2.1

調査対象者は20歳以上の者2137名。個別面接聴取法による。回答は2項目を選択。

表３－２　家庭における子供中心意識（%）
［時事通信社「時事世論調査」　年鑑世論調査平成３年・平成４年版より作成］

家庭生活を考える場合、子供を育てることを中心に考えるべきだと思いますか。それとも夫婦の生活を中心に考えるべきだと思いますか

	1990年	1991年
子供中心	16.6	18.1
どちらかといえば子供中心	39.5	38.7
どちらかといえば夫婦中心	25.6	24.1
夫婦中心	11.1	12.4
わからない	7.1	6.7

結婚生活がうまくいかなくなった場合、あなたは離婚すべきだと思いますか。

	1990年	1991年
離婚すべきだ	10.4	12.8
経済的に双方がやっていけるなら離婚すべきだ	15.2	11.6
もう一度うまくやれるように努力する	45.8	44.7
子供や家族のためにがまんする	16.8	19.3
社会的な対面を考えてがまんする	1.1	1.9
あきらめて添い遂げる	4.1	2.6
その他	0.5	0.7
わからない	6.2	6.3

調査対象者は全国20歳以上の者で、有効回答数は1990年が2137人（有効回答率71.2%）、1991年が1422人（同71.1%）である。個別面接聴取法によって実施された。

表３－３は、高校生に女性の理想的な就業の在り方を尋ねた結果である。最も多くの男女に望まれているのは、“出産退職再就職”である。“出産退職”をあわせると、男女とも半数が「子供」をもったらとりあえず仕事を離れるほうがよいと考えていることになる。これに対し、子供ができても職業をもち続けることを理想とする者は女性でも２割に満たない。仕事は犠牲にしても子供は親の手でと考える若者がかなり多い。これから社会に出ようとする青年たちにとっても“子供”は大切な存在なのである。

家庭における子供のこのような位置付けは他の国に比較するとどうであろうか。本庄（1992, 1993）は日本とヨーロッパの複数の国家での「結婚観」の比較を行なっている。その結果をみると、「結婚生活を続けるために重要なこと」として「子供がいること」については日本では表３－１と同様、５割程度が重視しているが、この割合は他の国々と大きな差はない。むしろ日本では「経済的安定」や「相手の両親や親戚」が他の国家に比べ重視されていることが特徴的である（表３－４）。この結果は生活共同体・経済共同体、そして血縁関係など、日本の結婚が「様々な社会的意味合い」を強くもっていることを反映していると考えられる（本庄,1993）。こうした社会的意味合いの強さが、“子供をもたないこと”への圧力の強さをもたらしているのかもしれない。

表３－３　女性の就業に対する意見（%）
［ライフデザイン研究,1994より作成］

あなたは、女性が職業をもつことについて、どのように考えますか。

	男　子	女　子
1. 結婚しても、子供ができても、職業を持ち続ける。	11	17
2. 子供ができたら一時やめて、子供の手が離れたらまた職業を持つ	32	40
3. 結婚しても子供ができるまでは職業を持つ	13	8
4. 結婚するまでは職業を持つが、結婚後は持たない	23	23
5. 女性は職業を一生持たないほうがよい	2	0
6. わからない	18	12

調査は1993年に行なわれた。調査対象者は東京50キロ圏内の高校生で、無作為抽出された。訪問留置法によって実施。有効回答数は614名（男子307名：女子307名）。有効回収率は68.2％である。

表３－４　結婚生活を続けるために重要なこと（%：多重回答）
［本庄,1992より一部抜粋して作成］

	日　本		イギリス		フランス		旧西ドイツ	
性別 有効回答数	男 501	女 497	男 445	女 651	男 520	女 504	男 524	女 468
経済的安定	91	92	81	79	54	55	72	67
互いの理解と信頼	91	91	91	93	85	86	92	95
互いの愛情	80	80	94	93	90	91	92	92
相手の両親や親戚	64	70	33	36	23	26	39	32
子供がいること	53	48	41	44	64	55	47	48
互いの性的満足	49	37	74	72	68	62	60	51
浮気をしない	38	42	58	66	71	75	82	83
育った家庭環境	25	29	20	28	15	21	19	19
子育てに関する考え方	35	42	42	51	42	41	30	43
お金に関する考え方	35	41	64	67	38	38	41	48
同じ趣味	35	40	37	44	15	18	18	22
宗教が同じ	17	21	19	22	16	19	13	13

調査は1991年に行なわれた。調査対象者は全国の18～59歳の男女で無作為抽出を行なった。日本では訪問留置法、イギリス・フランス・西ドイツでは郵送法によって実施された。

4. 血のつながり

結婚して“子供をもつ”ことは現代でも多くの人に支持され、望まれていることであるが、その「子供」との“血のつながり”に対する意識は現在でも強いのであろうか。

斎藤（1988）は大学生を対象に調査し、「自分の血のひいた子供が欲しい」とする意識が男子学生で83.9％、女子学生では91.2％におよぶことを報告している（表4－1）。大学生という若年層であっても、どちらかときかれれば血縁的な家族を望む気持ちが圧倒的である。さらに斎藤はこうした血縁意識と小学生期の環境との関連を検討している。その結果、女子では、「自分の血のひいた子がほしい」者は、家庭の主導権が「父」にあった割合が比較的多かった。保守的な傾向が強い家庭は血縁意識を高めるのかもしれない。一方、男子では、「自分の血をひいた子供がほしい」者は、父親から「世話を受けた」経験や兄弟と遊んだ経験、「赤ちゃんに接した」経験が多くみられた。男子では母親以外の家族との体験、とくにかわいがられたり、かわいがったりした経験が「自分の」子供を欲する傾向を促す場合があるようである。

表4-1　自分の血をひいた子供がほしい(%)
[斎藤,1988より作成]

	男　子 (1234名)	女　子 (1072名)
はい	83.9	91.2
いいえ	10.3	4.0
不明	5.8	4.8

1987年に実施。調査対象は東京・神奈川・埼玉・

このような血縁意識は、生殖技術への態度にも直結する。白井（1991）は既婚の男女を対象に人工生殖への態度を調査している(表4-2)。この結果をみると、夫婦いずれかの“血をひかない”子供が誕生する「代理母出産」と「AID」への反対が非常に強いことがわかる。その理由（自由記述）としても「血のつながり」や「親子関係」の問題を挙げる者が多いと報告されている。“血のつながり”が親子関係のきわめて重要な要因であることは現代でも変わらないといっていいであろう。“血をひく子供”が“自分の子供”であるという感じ方、考え方は日本では容易にくつがえせるものではないと思われる。

表４－２　人工生殖に対する態度（％）［白井,1991より作成］

		原則的に賛成	どちらともいえない	原則的に反対
夫婦体外授精	男性	58.1	23.7	18.3
	女性	55.1	28.8	16.1
借り腹出産	男性	18.3	24.7	57.0
	女性	11.0	28.8	60.2
AID	男性	8.6	17.2	74.2
	女性	4.3	19.1	76.5
代理母出産	男性	5.4	21.7	72.8
	女性	3.4	20.3	76.3

調査時期は1990年。調査対象者は神奈川県秦野市のH団地および長野県松本市の信州大学付属幼稚園の園児の父母である。有効回答数は211名（平均回収率20.3％）である。

5. “科学”との対峙

以上のように現代人の家族や子供への意識は、表面的には「新しく」なってきているようにみえても、実際にはあまり変わっていない。他者の行動・ライフスタイルに対して比較的寛容になってきてはいるが、自分の生き方の選択としては保守的なライフスタイルを選んでいる。同様に、人工生殖などを含む“科学”に対する態度も、実はあまり変わっていない。むしろ科学に対する不信や反感は広がる傾向にある。

表5－1は高校生の“科学”に対する感じ方を示している。現代高校生では、「科学ではわからないことがたくさんある」といった科学限界感が7割に、「科学の進歩が良い結果をもたらすとは限らない」といった科学不信感が6割以上にもたれている。「科学はこれ以上進歩しないほうがよい」や「科学の進歩は不幸をもたらした」という積極的な科学否定は1～2割で少数派ではあるものの、「科学が進むと人間らしさが奪われる」という人間疎外感は3～4割と、比較的多くの青年が感じている。全体的に「科学」への信仰はもはやなく、むしろその弊害を危ぶむ気持ちのほうがもたれているといえよう。

このような科学への不信と表裏をなすものに、神秘的なものを信じる人々の増加がある。図5－1は「あの世・来世」を信じている人の割合を生年別にあらわしたものである。若年層であの世を信じる者が多い。またどの年齢層でも近年になるにつれ信じる者が増加している。

表5－1　科学に対する態度（%）［ライフデザイン研究,1994より作成］

	男　子	女　子
世の中には科学では分からないことがたくさんある	68	67
科学の進歩がいつも良い結果をもたらすとは限らない	63	64
科学が進むと人間らしさが奪われると思う	30	38
科学はこれ以上進歩しない方が良い	14	13
科学の進歩は不幸をもたらした	19	14

調査は1993に実施された。調査対象者は東京50キロ圏内の高校生で、無作為抽出された。訪問留置法によって実施。有効回答数は614名（男子307名：女子307名）。有効回収率は68.2％である。

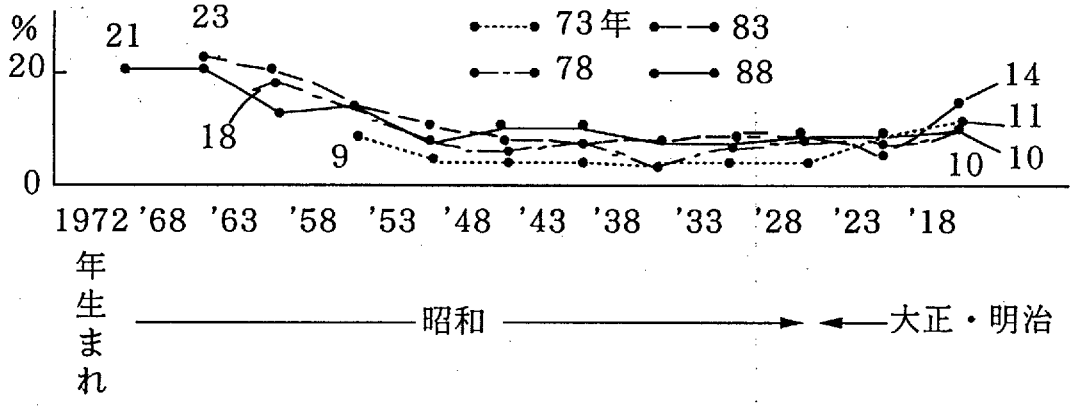

図5－1　あの世・来世を信じている人（%）［NHK世論調査部,1991より引用］

全国16歳以上を対象に無作為抽出し、個人面接法によって実施されたものである。

さらに表5－2は高校生が生命に関わる神秘現象を信じている程度を示している。「霊」の存在を信じている者は半数におよぶ。他の現象に関しても2～3割が信じている。これらの結果は直接的な質問に対する回答であり、なんとなく「霊」をおそれてしまうなど潜在的な神秘的傾向をもつ者はさらに多いと考えられる。松井・福富・上野・加藤・上瀬・上田(1992)は、これら「霊」などを含む神秘現象を信じる度合いと、科学への態度との関連を検討している。その結果、科学限界観が強い者ほど、神秘的傾向が強かった。すなわち、霊や魂を信じる者が増加する背景には、科学への不信や限界観が潜んでいると考えられるのである。こうした傾向は、水子供養などをはじめとする出産に関わる信仰や、祖先や墓の意味づけなどの今後の在り方に関わってくるであろう。人工生殖などが仮に頻繁に行なわれたとして、それによって神秘的な生命感が減少する可能性もあるが、むしろ、このような神秘的傾向が、人工生殖による子供を自分の子として感じることを妨げたりするような

表5－2 「生命」に関連する神秘現象を信じている人(%)
[ライフデザイン研究所,1994より作成]

	男 子	女 子
霊	47	52
神仏の存在	23	25
死後の世界	27	29
たたり	24	23
神社などのお守り	22	32

調査は1993年に行われた。調査対象は東京50キロ圏内の高校生で、無作為抽出された。訪問留置法によって実施。有効回答数は614名（男子307名：女子307名)。有効回収率は68.2％である。

「心情的な抵抗」として様々な問題を引き起こしてゆくことが考えられる。いずれはそのような人工生殖すら説明するような神秘的摂理が考え出され信じられてゆくとしても、その過渡期に苦しむ者は少なくないであろう。

このような心情的な抵抗、あるいは科学への不安と関連するものとして、“自然である”ことを大切にする心理的傾向をあげることができる。たとえば白井は体外授精に対する賛否とその理由を自由記述法によって質問した結果をまとめている(白井,1986 白井,1990より引用)。体外授精に対する賛成論の根拠は、①プライバシー権としての出産、②不妊の代替的治療法としての体外授精、③性と生殖の分離の受容の3点にまとめられた。一方反対論は、人間生命の始期における医学的介入が①人間の尊厳を損ない、②自然の摂理に反することが主な根拠になっていた（表5－3)。さらに判断を保留した者の場合には「プライバシー権としての出産を代替的に保障するための技法としての体外授精」と「自然の摂理」の2つの考え方が拮抗対立していた。すなわち「自然な出産」を重要視する意識が人工生殖への危惧を生みだす大きな要因となっているのである。“自然がいい”という払い難い思いが感じられる。

現代においても水子供養は盛んであり、むしろ参加者が増加しているといわれている。人間の生活における疑問や課題、悩みに対して答えるものとして広い意味での宗教や信仰はなくなることはないであろう。科学信仰も崩れた結果、神秘や自然に回帰しようとする人々が増えていくのは当然かもしれない。生命の領域に人が入り込むことに対する心理的抵抗は弱いものではない。たとえ一時期自分から求めて人工生殖で子供をもったとしても、あとからこのような抵抗感が顕在化してくることもある。“自分の子供”と感じたり、その子供に“苦労させられる”ことに耐えるには、一種の信仰的な信念が必要だからである。遺伝的につながらない子供を自分の子供と感じられるような宗教的解釈が個人にとっては重要なのである。

表5－3　体外授精に対する賛否の理由（件数）［白井,1990より作成］

	賛　成 (101名)	反　対 (25名)	判断保留 (43名)
不妊の代替的治療法として	55	0	12
プライバシー権	19	0	4
性的結合と生殖の分離を受容	29	0	0
人間の尊厳をそこなう	0	5	0
自然の摂理に反する	0	17	4
実験条件（1）：技術的安全	5	2	5
実験条件（2）：対象の限定	18	3	7
実験条件（3）：倫理規定の確立	10	3	7
その他	1	3	8

調査対象者は日本社会心理学会会員。自由記述法による調査結果の集計。

以上、現代日本での子供をもつことに関わる意識としては、第1に子供を積極的にほしいと感じる人が多いこと、第2に子供をもつべきであるという強い社会的規範があること、第3に子供は家庭の中心的な存在であること、第4に子供との血縁関係を重視する傾向は根強いこと、第5に生命に対する神秘観や自然であることを大切にする気持ちは強く、科学技術による介入には少なからず抵抗感があることなどをみることができる。

引用文献

福富護・上瀬由美子・松井豊・加藤千恵・上野行良・上田康子 1992 高校生の理想の生き方－現代高校生の生活意識(1)－日本教育心理学会第34回総会発表論文集,235.

本庄美佳 1992 変容する結婚観・家族観　電通総研

本庄美佳 1993 変容する結婚観・家族観　日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 38-41.

金子隆一 1989 結婚への意識　厚生省人口問題研究所　昭和62年第9次出産力調査第Ⅱ報告書 Pp.9-20.

鹿志村和子 1992 「子供をつくる女性」と「子供をつくらない女性」に関するイメージの比較-1：大学生-日本社会心理学会第33回大会発表論文集, 126-127.

鹿志村和子 1993 「子供をつくる女性」と「子供をつくらない女性」に関するイメージの比較2：20代未婚女性と40代以上既婚女性　日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 168-169.

ライフデザイン研究所 1992 現代高校生の生活環境　同研究所発行

ライフデザイン研究所 1994　現代高校生のライフスタイル・意識・価値観同研究所発行

松井豊・福富護・上野行良・加藤千恵・上瀬由美子・上田康子 1992 高校生の科学観と宗教への関心-現代高校生の生活意識(4)-, 日本教育心理学会第34回総会発表論文集,238.

内閣総理大臣官房広報室　1991　女性の暮らしと仕事に関する世論調査

NHK世論調査部 1991 現代日本人の意識構造［第三版］日本放送出版協会

大谷憲司 1988 予定子供数と理想子供数　厚生省人口問題研究所　昭和62年第9次出産力調査第Ⅰ報告書 Pp.61-66

大谷憲司 1989 希望する子供数・性別組み合わせ　厚生省人口問題研究所　昭和62年第9次出産力調査第Ⅱ報告書 Pp.73-77.

白井康子 1990 先端医療に対する社会的態度－生命倫理の問題を中心に－, 心理学評論, 33, 71-85.

白井康子 1991 人工生殖の比較法的研究：日本(1)社会的態度, 比較法研究, 53, 61-74.

杉内明子・佐藤文彦・川越慎之助・広井正彦 1992 不妊症夫婦の精神心理　月刊 Sexual science, 1(4).

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

子供をもつことに関する時代の風潮などについての洞察的な論考は数多くある。しかしそれらは、眼につきやすい小集団や衝撃的な事件の報道などに基づいた考察が多く、大勢を占めるはずの目立たぬ人々のことが意外に無視されている場合が多い。そこで本報告では、子供をもつことにかかわる最近の意識調査の報告をまとめて紹介し、子供をもつことをめぐる現代人の意識の一般的な傾向を知る手がかりにしたい。